鬼火

ぺ子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
鬼火

【Ｎコード】
Ｎ２４０９Ｊ

【作者名】
ペ子

【あらすじ】
何の為に戦うのでしょうか。

少しだけ時間が止まればいいと願った。その短い時の中でこの手を止めることができたら、どんなにいいだろうか。変わらず頭上に存在する空に嫌悪と拒絶と千切れた羨望を、壊土には磨り減った信奉を向けてはまた繰り返す行為。何から逃げ何を追い掛けるのか僕らは。僕らは何を恐れ何に向かってるのか。考える時間すらない。僕に与えられた時間は一秒もない。動きを止めてしまえば死に向かうだけだ。

もしこの物語の最後に真実を知ることができるのなら、いっそのことすべてを終わらせてしまえばいいのに。しかし僕達は真実を求め争い続ける。それは終わりのない遊びだった。終わりに知る真実など大体は後悔と歪みに決まっている。それだけは理解していた。人は真実ばかりを知りたがる。そこに救いなどないのに、絶望を知り落胆する姿が目に見えているのに。僕もそんな人間の一人にすぎないとしたら、真実など必要ない。僕は戦い続ける。この戦いの意味など知らなくとも、僕は目的をもちながら戦い続ける。

僕はあの方をお護りする為だけに作られた兵器だ。この命はあの方の為に生き、あの方の為に消えゆくもの。僕の誇りであり僕らの生きる意味でもある。僕らが生きる為にはあの方の存在が必要だから。瞬時に放たれた痛みに耐え、引き裂かれた傷跡から出る血の勢いに気づかないふりをしていた。それなのに、僕の目には僕と同じように血を流し痛みに顔を歪める者がいた。気づかないふりをしたって駄目だ。この争いが続く限り目を逸らすことはできない。自分の手を振り下ろした瞬間、穴の開いた水道管のように血が噴出し地面を、僕を真っ赤に染め上げた。自分の血ではないはずなのに、酷い痛みと眩暈が僕を襲った。その後ろで叫びが聞こえた。そして一

瞬にして静けさが僕を支配する。

人がつくった夜の庭には夥しいほど躯が連なっていた。また、その上に躯が重なり視界の半分が埋め尽くされた。目が開いたままの死体、泥のように崩れ落ちてゆく死体…僕は不思議と全く恐怖を感じないままその山を無心で見つめていた。辺りを見渡しても視界に入るのは無残な塊達。その時、お経を呟く声が耳に入った。言葉を聞き分けることはできないが、それがお経だと分かった。声のする方を見ると青い炎が躯の周りを揺れ動いている。幻か…ならこの死体の山、僕が生きていることも夢幻であればいいのにと思った。奇妙なほどに重なった死体の山よりも、自分が生きているという事実が一番恐ろしかった。

それは人ではない…しかし、人の形をした靄だった。一体一体、死体の上を行き来している。傍から見れば黙然と進む葬列だ。青い炎、靄が躯を燃やす。チリチリと音が鳴っていた。暗闇の中で燃える炎は眩く光にも見えた。

「あの方の為に生きるのなら、あなたも死ぬべきですよ」

靄が僕に言った。人間の声に似ているようで、獣を想像させる声だった。恐ろしいまでに低い声、耳に強く残る声…喪に服す獣が僕の前に現れた。これは死神だろうか、僕の目の前に人間ではない生き物がいる。実体はないのに存在しているのだ。青い炎が作り出した幻影なのか。

「あの方はもういません。我々が先ほど灰にいたしました。終わったのです、すべてが」

「終わり…僕達も終わり」

「そう。あなた達はもう争わなくていいのです」

「なら、生きている僕は誰の為に生きればいいのですか？これは終

わりじゃない、僕は生きている」

「答えは簡単。今ここで死ねばいいのです。我々がこの躯達と共にあなたの身体も灰にしてみせましょう」

靄は炎の化身か、炎が僕に伝えた。僕は銃口を自分の顔に向ける。敵に向けられた銃口よりはるかにはっきりと黒く見える穴。小さく真っ黒な穴の奥からすすり泣きが聞こえた。その瞬間、今まで感じなかった恐怖が身体を支配し、人間の死の臭いが鼻の中で充満した。これが死だ、これが争いだ。僕は生きながらにして死を味わった。気づかずに何度も何度も。

「幸せになる為に争ったのですか？その幸せは本物ですか？最後に残るものなんてたかが知れています。この光景を見ればわかるでしょう」

愚かなことに僕は生きたいと願ってしまっていた。争いの中で全く死を恐れなかった僕が、終わりを知ったことによって死を恐れているのだ。

「狂っているのは法か僕らか、或いはどちらも…」

呟いた真実は濁る空へと溶けていった。喪に服した獣の姿は消え、青く光る炎が争いの終わりを告げていた。この醜い世界がせめて美しい終焉を迎えるよう、揺らめく鬼火を見つめながら最初で最後の祈りを捧げた。

（後書き）

争いに携わったすべての人々に安らかなる眠りを。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2409j/

鬼火

2010年12月10日23時31分発行